

日 本 語 2

カイザー シュテファン・山崎由喜代

Japanese 2

Stefan KAISER, YAMASAKI Yukiyo

担当 カイザー シュテファン、木戸光子、小林典子、田中亜子、山崎由喜代

週7コマ（+選択科目、漢字1,2,3）

登録者数、25人前後

1 対 象

日本語の初級前半を終わっている人（学習時間：300時間、単語：500～800語、漢字：100字以上）ということになっているが、日本語1を少人数に押さえるため、実際はもっと低いのが現状。国籍はいろいろだが、欧米やタイからの短期留学生、中国・韓国などからの研究生、JICAから派遣された南アジア・東南アジアからの学生などである。

2 主な内容： SFJ13課～24課（SFJ5課～11課は復習）

基本的な文法・語彙能力をゆっくりめに身に付けるために、SD（一課につき三コマ）を中心にコースが組み立てられている。会話力や聴解能力の向上もあわせて目標としているため、モデル会話やCDなども練習させ、『わくわく文法リスニング』を積極的に使用している。文章を書く能力を身に付けるため、またあわせて教科書以外の内容を履修させるためには、週1コマは作文とスピーチに当てている。（「作文とスピーチ」参照）

SDやCDの準備として、それぞれの時間の前に予習シート・CDチェックを作成させ、提出させている。

評 価： SFJの1-12課の復習テストは各自の弱いところ・強いところを見るためにコースの始めに課すが、成績には数えない。また、小テストは13/14課から23/24課まで教室で書かせ、こちらは成績の10%として数える。その他には、中間テストと期末テスト（それぞれ文法・聴解・作文）が計80%として数えられるが、期末テストには最終スピーチも含まれる。残りの10%は作文と普段のスピーチに当てられている。

問題点： 漢字圏・非漢字圏が混在しているので、特に書かせる練習やテストなどでは、大

きな時間差が出てしまう。読ませる時にも、そうした漢字力の差が問題になる。

また、日本語1との関係などにより、人数もこのレベルのクラスとしては比較的多く、日本語能力の差もそうとうの広がりを見せているので、理想的には二つのレベルに別れて開設した方が学生にとってよりよいと思われる。

作文とスピーチ

山崎 由喜代

内容と進め方：

1. 作文課題

テスト以外に宿題として6～7つの作文(200字～400字)を課す。

おおよその題を決め、作文に使ってほしい表現文型を示す。モデル作文のプリントを配布し、クラスで音読する。その他、出来るだけ多くの文型を使うことが望ましいことを伝える。

2. 作文添削とフィードバック

学生が自力で直せるだろう間違いは赤ペンで下線を引き、自力では直せないと思われる箇所は直しを入れる。意味不明で読解できない箇所には「わかりません」と書き、下線を引いておく。間違い箇所が多く、書き直したほうが良いと判断した場合には、「再」と書き入れ、書き直しを求める。

他の学生にも役立つと思われる間違いについては、クラスで投影機を使って間違い箇所を示して、フィードバックする。

3. 課題例 (2003年2学期)

第1回：「私の国の習慣」、(～テ) アゲル、(～テ) モラウ、(～テ) クレル

第2回：「もし～たら」、～テミル、～テオク、～テクル、～テイク、～テイル

第3回：クラスメイトにインタビューしてを紹介する文を書く～トイッテイル、
～ト思ッテイル

第4回：「かわいそうな私」、受け身、～テシマウ

第5回：「忘れられない思い出」、過去形表現、～シタ、～シテイタ

第6回：「方法の説明」マズ、次ニ、ソレカラ、最後ニ、～テ～、～タラ、～ト～、～前ニ、
～後デ、～テカラ、～ナガラ

4. 作文テスト3題

「教室の有名な人」

「日本に来て何をしましたか」

「日本語のコースが終わったら、何をしますか」。

5. スピーチ課題

テスト以外に提出作文の中から本人が選んだ原稿でスピーチをする。

希望者は生テープを持ってくれば、自宅での練習用に教師に原稿を録音してもらえることが知らされる。

6. スピーチ時の注意

原稿を読まないこと、他の学生にとっての未知語はA4サイズの単語カードを用意して示しながら話すこと、わかる発音で話すことが求められる。

1～3問程度の質疑応答がある。

7. スピーチテスト

「どちらがいいか比べるスピーチ」

評価（作文宿題・作文テスト・スピーチ平常・スピーチテスト各2.5点）

（作文宿題の評価は提出の有無だけだったが、2003年2学期はA,B,C,D評価をつけ、再提出でよくなっていれば多少の加点をした。）

1. 作文の基準：「文法の正確さ・文型の豊かさ」・「内容」

2. スピーチの基準：「文法の正確さ・文型の豊かさ」・「内容」・「発音・流暢」・「準備」

但し、テストでは、「発音・流暢」と「準備」を一つにまとめた。

状況：

熱心な学生や提出が滞る学生など提出状況は学生によって異なる。

通常の授業についてくるのが難しい学生は作文提出もスピーチも難しく、できない。また、コース終了間際に一度に大量に作文提出する学生がいる。

よい点：

自分の体験や考えを日本語作文で表現することを楽しんでいる学生が毎回おり、表現のた

めのよい機会になっている。

スピーチ発表はする側も聞く側も楽しんでいる。質疑応答で学生間の交流を楽しんでいる。
クラス全体での作文フィードバックは熱心に聞いている。

問題点・課題

宿題作文に評価点を記入するようになってから、初稿の段階で他の助けを借りたと思われるかなり完成された作文が増えた。

力不足の学生のために200字程度の作文でも可としているが、現実的に一段落文でなければ200字程度の作文は難しい。また、200字程度でも書けないと思われる学生がわずかだがいる(2003年2学期はいなかった)。一方で、200字よりも多く書いてしまう学生がほとんどである。

何らかの理由でクラスを連続して休む学生は、結果的に作文・スピーチのクラスに出席しなくなる、

スピーチ時に読んでしまいがちになる。

他の学生に分からない難しい単語を使って作文を書き、スピーチをする。

対策

一段落作文を課す。一段落作文なら、どのレベルの学生にも気軽に書け、スピーチ時に暗記して話せる。